

人間回帰の叫び

— Melville の “Cock-A-Doodle-Do!” について

岡村仁一

— Yet what's the use of complaining?!

1. はじめに

Sealts の推測によると、Melville が “Cock-A-Doodle-Do!” を執筆した時期は「1853年の春から夏にかけて (spring and summer of 1853)」² であろうという。実際、世に出たのは、同年、*Harper's New Monthly Magazine* の12月号に掲載されたときで、これは *Putnam's Monthly Magazine* の11月号に “Bartleby, The Scrivener” の第一回分が掲載されたのに続くのであるが、Parker はむしろ「“Bartleby” は “Cock-A-Doodle-Do!” の後に書かれた (“Bartleby” was written later than “Cock-A-Doodle-Do!”)」³ と仮定し、「Melville は “The Happy Failure” と “The Fiddler” を最初に書くことによって手慣らしをしたのかもしれないが、そうであったとしても、時を経ず、続けてずっと長い “Cock-A-Doodle-Do!” と “Bartleby, the Scrivener” に取りかかったのだ (He may have exercised his fingers with the short “The Happy Failure” and “The Fiddler” first, but if so he rapidly proceeded to the much longer “Cock-A-Doodle-Do!” and “Bartleby, the Scrivener” as well.)」⁴ と推測している。

確かに、発明に失敗した語り手の叔父の “Praise be to God for the failure!” (261) という叫びで終わる “The Happy Failure” や “So my poem is damned, and immortal fame is not for me! I am nobody forever and ever. Intolerable fate!” (262) という語り手の叫びで始まる “The Fiddler” には作者 Melville が *Pierre* で受けた酷評の影が色濃く反映されている様に感じられる。更に不思議なことに、その二作と時を置かずに執筆されたという “Cock-A-Doodle-Do!” と “Bartleby, the Scrivener” の二作品もそれぞれが物語の最後で、 “COCK-A-DOODLE-DOO! — OO! — OO! — OO! — OO!” (288) 及び “Ah Bartleby! Ah humanity!” (45) と語り手が叫ぶことにより幕を閉じている。だとすると、これらの叫びにはどのような意味が込められているのであろうか？ 本論ではその叫びが表題にさえなっている “Cock-A-Doodle-Do! or the Crowing of the Noble Cock Beneventano” の鶏鳴について考察していきたい。

2. 鶏鳴の萌芽

2.1. 世の悲惨を隠す霧

物語の冒頭、陰鬱な気分で散歩に出た語り手は、丘の上に腰を下ろし、山の麓に広がる村を覆っている霧の様子を観察し、以下のように描写している。

Low down, here and there, shreds of vapor listlessly wandered in the air, like

abandoned or helmless nations or ships — or very soaky towels hung on criss-cross clothes-lines to dry. (269)

そして語り手はこの霧が世の悲惨を隠していることに思いをはせる。

It was too heavy and lifeless to mount of itself; so there it lay, between the village and the sky, doubtless hiding many a man with the mumps, and many a queasy child. (269)

この記述は後の、病床に伏す Merry musk 一家登場への伏線となっている様に思える。作品 “Bartleby” の語り手は「ああ、幸福は光を身に纏うもの、それ故我らはこの世は陽気なものとする。しかし悲惨は気高くも身を隠すもの、それ故我らは悲惨などこの世に存在しないと考える。Ah, happiness courts the light, so we deem the world is gay; but misery hides aloof, so we deem that misery there is none.」(28) と言っているが、“Cock-A-Doodle-Do!” の語り手も、この世の悲惨さから目を離すことが出来ない人物として登場する。語り手はこの悲惨な状況について一旦は

Yet what's the use of complaining? What justice of the peace will right this matter? Yea, what's the use of bothering the very heavens about it? Don't the heavens themselves ordain these things — else they could not happen? (269)

と諦念を装いつつも、やはり憤懣やるかたなく、間髪を置かず、「惨めな世の中だ! (A miserable world!)」(269) と叫び、また更に次の段落で「(Great improvements of the age!)」(270) と叫んでもいる。ここに見られるように、語り手はこの世の悲惨な状況が顧みられないことに対する不満の現れと同時に、その批判の矛先を何処に向けたらよいか知れぬ苛立ちから、「叫ぶ」という行動に出ているのである。

しかし語り手が執った行動はこの不満の叫びばかりではない。語り手は世の悲惨を認識し、不満を感じ憤っているのみではなく、自ら悲惨な状況を改善しようと実際に行動に出てもいる。

It's a lie; money ain't plenty — feel of my pocket. Ha! here's a powder I was going to send to the sick baby in yonder hovel, where the Irish ditcher lives. (270)

この記述から、語り手が現在、借金取りに追われている一因が、貧しい病人に薬を届ける様な慈善活動にあった可能性が伺われる。更に

Ah! there's that twinge of the rheumatics in my right shoulder. I got it one night on the North River, when, in a crowded boat, I gave up my berth to a sick lady, and staid on deck till morning in drizzling weather. (270)

と言ってもいるが、

There's the thanks one gets for charity! Twinge! Shoot away, ye rheumatics! Ye couldn't lay on worse if I were some villain who had murdered the lady instead of befriending her. (270-71)

と、善意の代償として肩にリウマチを患ったことに悔悟の念とも取れる発言もしている。この様に、己の善意が不首尾に終わった無念の気持ちが "There's the thanks one gets for charity! Twinge! Shoot away, ye rheumatics!" という叫びに込められているのである。

冒頭の場面で、丘に腰を下ろした語り手が早春の風景を見渡して「結局のところ、人間がこの大地に残せるのは何と小さな印であることか (what a slight mark, after all, does man make on this huge great earth.)」(269)と独り思う背景にはこのような自らの大いなる望みと微々たる成果、いやむしろ失敗の歴史が秘められているのである。

2.2. 鶏鳴の登場

それに対して、「大地は人間に爪痕を残す (Yet the earth makes a mark on him.)」(269)例として、先ず列車事故の様子が語られ、「相手方の列車の客車の脇に突っ込んだ機関車はまさに殻を破って出てきた雛のような状態で発見された (and one locomotive was found fairly shelled like a chick, inside of a passenger car in the antagonist train)」(269)と描写されている。後に鶏鳴を追って線路脇の Merrymusk の住まいに辿り着いた語り手は、Merrymusk から鶏鳴を発する雄鶏の正体について「ここで卵から孵り、私が育てました (It chipped the shell here. I raised it.)」(283)と告げられることになるが、悲惨な事故現場の描写で「殻を破って出てきた雛」に言及することにより、語り手は無意識のうちに鶏鳴の登場を予告しているのである。このような前提に立つと、物語の中心となるべき鶏鳴は、悲惨とは切っても切れない間柄、つまり悲惨の中からのみ生まれてくる存在として既に設定されていることに気づかされる。

Dillingham は「重要な点は、鶏鳴は語り手の外部の何らかの力の顕示ではなく、語り手が新たに獲得した『普遍的な安心』や『自らのために、独力で』世間を『独り蔑み、独立する』関の声、そして世間が最も恐れているものの外部への表出である (The point is that the crowing of the cock is not a manifestation of some force external to the narrator but the externalization of his newly acquired "universal security," crowing "solely by himself, on his own account, in solitary scorn and independence" of the world and the things the world fears most.)」⁵と述べている。語り手は「いつ何時腹を空かした飼い主によって死がもたらされるやもしれぬ状況 (with death hanging over him at any moment from his hungry master)」に置かれながら、「低地に身を持す雄鶏 (a cock down in the lowlands there)」が「ニュー・オーリンズの栄えある勝利を祝っているまさに桂冠詩人の如く鶏鳴を発している (send up a cry like a very laureate celebrating the glorious victory of New Orleans)」(271)のを耳にし、自らが為し得なかった理想を体現したものとして深い感銘を受ける。語り手が自らの失敗を克服した存在として鶏鳴を捉えている点は

Nor did it sound like the foolish, vain-glorious crow of some young sophomore cock, who knew not the world, and was beginning life in audacious gay spirits, because in wretched ignorance of what might be to come. (274)

という記述からも伺える。雄鶏の姿が一向に見えないことに対し、語り手は「この神秘的なものにはある種の欺瞞があるのではないのかと私は考え始めた。つまり何処かの素晴らしい腹話術師が我が家の納屋の周辺や地下室の中、或いは屋根の上を徘徊し、悪ふざけをしたがっているのではないのか (I began to think there was some sort of deception in this mysterious thing: some wonderful ventriloquist prowled around my barns, or in my cellar, or on my roof, and was minded to be gaily mischievous.)」と疑いを感じもするが、すぐに「いや違う、いったい如何なる腹話術師がかくも英雄的、かくも天上的な美声を発しうるものなのか? (But no — what ventriloquist could so crow with such an heroic and celestial crow?)」(279) とその疑念を払拭している。語り手にそのような判断を下させた根拠は、鶏鳴の本質がまさに語り手が為し得なかった「他のどの鶏鳴にも応ぜず、唯我独尊、孤高の蔑みと独立のうちに関の声を上げた (He replied to no other crow, but crowed solely by himself, on his own account, in solitary scorn and independence.)」(275) 点にあると考えられたからだ。

2.3. 語り手と Merrymusk の関係

Dillingham は「語り手がなりたがっているもの、乃至はなる可能性を有しているものの代表として Merrymusk が意図されていることは、他の誰も Merrymusk を目撃しないし、他の誰も鶏鳴を耳にしないという事実から推測される (That Merrymusk is intended to represent what the narrator wants to be and can be is suggested by the fact that no one else ever sees him or hears the crowing of the cock.)」⁶ と言い、「Merrymusk は語り手の分身として機能している (Merrymusk functions as the narrator's alter ego.)」⁷ と指摘している。語り手は Merrymusk に初めて会ったときの印象を「悲しげな顔 (saddish face)」と「喜びに満ちた目 (joyous eye)」の「最も奇妙な対照 (the strangest contrast)」(280) にあったと言っている。後に彼の住居を訪ねた際、語り手は Merrymusk の妻の顔を「疲れ果てていたが、奇妙に快活な人間の顔 (a wasted, but strangely cheerful human face)」(285) と描写し、また子どもたちの様子を「彼等の疲れ切った目は興奮し、霊的な喜びに満ちて雄鶏を見つめていた (All their wasted eyes gazed at him [=the cock] with a wild and spiritual delight.)」(285) と描写している。ここにはいずれも悲惨と喜びが同居している姿が見て取れる。語り手の家で吹雪の中、鋸をひく Merrymusk の様子は「ギコ、ギコ、ギコ、ヒュー、ヒュー、ヒュー。鋸と雪とは二つの天然の物であるかのように調和していた (Saw, saw, saw — snow, snow, snow. The saw and the snow went together like two natural things.)」(280) と描かれているが、その後、鋸仕事のことが「大半の人にとっては酷く退屈で嫌気のさす仕事 (a most wearisome and disgustful occupation to most people)」(280) だと説明され、また「この男は辛い時代を経験し、辛酸を嘗めてきたのだ、と私はひとり合点した (I concluded within myself that this man had experienced hard times; that he had had many sore rubs in the world)」(280) と述べられていることから、鋸は勤勉

さの印として、雪は悲惨の象徴として配置されている。ParkerはMerrymuskの勤勉さを「書記バートルビーの様な勤勉さ (such industry as Bartleby the scribener)」⁸と使い、この「勤勉さ」に注目して両者を関連づけているが、それとは別に、Melvilleの作品中、特にMerrymuskを想起させる人物として挙げられるのが、*Moby-Dick*に登場するPequod号の船鍛冶、Perthである。Merrymuskは「若い頃船乗りであった (In youth he had been a sailor)」(281)とされているが、Perthは「悲しみの専門用語で言うところの破滅に、六十近くになって遅ればせながら遭遇した老人である (He was an old man, who, at the age of nearly sixty, had postponedly encountered that thing in sorrow's technicals called ruin.)」⁹と言われ、酒 (Bottle Conjurere) によって家庭が崩壊し、海に出たと言われている。まだ陸にいて幸せな家庭を築いていた時分、「彼は腕の確かな評判の職人で仕事も繁盛 (He had been an artisan of famed excellence, and with plenty to do.)」し、「仕事場は住まいの地下にあった。…というのも若くて愛情こまやかな、健康な妻は、歳の程はもう若いとは言えないけれども、仕事の腕は若さ溢れる夫の力強くふるうハンマーの音が、神経に障るどころか、むしろ活気に満ちた喜びとなって聞こえていたからだ (the blacksmith's shop was in the basement of his dwelling. . . so that always had the young and loving healthy wife listened with no unhappy nervousness, but with vigorous pleasure, to the stout ringing of her young-armed old husband's hammer)」¹⁰と説明されている。このPerthのハンマーはMerrymuskの鋸に相当するものとして捉えられる。更に、このハンマーの奏でる音はMerrymuskが鋸をひく音、“Saw, saw, saw”に通じ、ここに人間の手による「勤勉さ」を示す活気ある音、美的なりズムを伴った心地よい音として、鶏鳴の原初的な萌芽が感じられる様に思える。それは丁度、「雄鶏というより黄金の鷲といった方が良い雄鶏 (A cock, more like a golden eagle than a cock.)」(282)に対比して、語り手に言わせると「羽毛の輝きの銜いなどこれっぽっちもない人參色の十羽の怪物 (ten carrot-colored monsters, without the smallest pretension to effulgence of plumage)」(278)に他ならぬ上海鶏が登場する様に、「聞け！あの忌々しい竜、あのモロクのような巨大な虻がまたやってくる—シュッシュ、ポッポ、キー！（Hark! here comes that old dragon again — that gigantic gad-fly of a Moloch — snort! puff! scream!）」(270)や「250マイルに渡ってあの鉄の悪鬼が大地を通して叫びながら進んでいく—モウ、モウ、モウ！と叫びながら (For two hundred and fifty miles that iron fiend goes yelling through the land, crying “More! more! more!))」(270)と描写されている機関車の音が、人間性など微塵も感じられぬ無機質な耳障りな音として、乃至は恐ろしい音として、作品中に並置されているのである。

3. 鶏鳴の本質

3.1. 語り手の認識の変化

初めて鶏鳴を耳にしたとき、語り手はそれまでの憂鬱な気分から一転して陽気な気分となり、

Unwittingly, I found that I had been addressing the two-year-olds — the calves — in my enthusiasm; which shows how one's true nature will betray itself at times in the most unconscious way. (271)

と言い、更に

Bless me — it makes my blood bound — I feel wild. What? jumping on this rotten old log here, to flap my elbows and crow too? (271)

と自らの心浮き立った心情を吐露している。Dillingham は「鶏鳴を聞くことにより語り手の周囲への認識は劇的に変化する (With the trumpet sound of the cock, his perception of his surroundings changes drastically.)」¹¹ と言っているが、確かに語り手の視線は、物事の暗い側面から一転して明るい側面に向けられている。例えば、「鉄の悪鬼」と呼んでいた筈の機関車の音を「何と心地よくあの蒸気パイプは囀ることか! (How cheerfully the steam-pipe chirps!)(272)と表現し、「おたふく風邪に罹った多くの大人や吐き気をもよおしている多くの子ども」を隠していた筈の村の煙は「それから村の青い煙を見てみたまえ、花嫁の寝所を飾る青い天蓋の様ではないか (See the azure smoke of the village, like the azure tester over a bridal-bed.)」(272)と一変し、「カラスでさえもある種の恍惚に浸って鳴いており、いつもより、幾分黒さも薄れている様だ (Even the crows cawed with a certain uncton, and seemed a shade or two less black than usual.)」(274)とまで言っている。しかし Fisher は「雄鶏の影響により語り手が、手始めに、仔牛に話しかけたり、雄鶏のように関の声を上げたり、肘をばたつかせたりしても我々は語り手が健康と活力の源を発見したとは容易に結論づけられない (If the influence of the cock makes him talk to calves, crow like a rooster, and flap his elbows — just for openers — we cannot easily conclude that he has found the source of health and vigor.)」¹² と言う。

3.2. 鶏鳴に潜む危険性

Bickley は「スペイン金貨に刻まれた関の声を上げる雄鶏が Ahab 船長にとってそうであるように、“Cock-A-Doodle-Do!” の雄鶏は語り手にとって誇り高き挑戦の象徴である。しかしながら両者にとって挑戦的な立場は大変な不幸をもたらすとまでは言えないにしても、間違った方向へと導くものなのだ (As the crowing cock on the doubloon was for Ahab, so the rooster in “Cock-A-Doodle-Do!” is for the narrator a symbol of proud defiance; for both characters, however, the defiant stance is misguided, if not disastrous.)」¹³ と分析し、更にその事例として、「語り手にとっての肉体的な不安と反感の主たる原因は経済的な不安定さにある。…しかし結局のところ、語り手の救済を妨げているのは借金取りなどではなく、語り手自身が経済的な責任を果たせないでいることなのだ (For a major cause of the narrator’s physical discomfort and antagonism is his financial insecurity. . . . It is, after all, not the dun that would prevent the narrator’s salvation, but his own failure to meet his financial responsibilities.)」¹⁴ という点を挙げている。Dillingham は「強力な自己賛美には必ず利己心が伴う (Intense self-glorification is always accompanied by selfishness.)」¹⁵ と指摘しているが、事実、船内でご婦人に席を譲ったり、貧しい病気の子どもに薬を届けたりしていた他人への思い遣り深い語り手が、親戚の訃報が届いても、鶏鳴によって得られた気分の良さに安住し、「喪服も纏わず、三日ぶっ続けていつもの黒ビールに優先して、より黒いスタウトビールを飲み続けた (I wore no mourning, but for

three days drank stout in preference to porter, stout being of the darker color.)」(286)と記されてもいる。Merrymusk が言うところの「絶望を防ぐ薬 (stuff against despair)」(285)は一步間違えると正常な感覚を麻痺させる麻薬ともなりかねないのだ。ここで語り手は明らかに自分の進むべき方向を見失っており、恍惚に浸った語り手が執っている行動は、責任逃れの無目的な現実逃避だと言うことさえできる。語り手がこのような行動に走ることに対し、Fisher は「信頼と傾倒も極端に走ると、認識を誤り、酷い錯乱に陥る可能性がある (the extremes of confidence and commitment could betray perception and lead to severe derangement)」¹⁶と警告している。

3.3. 語り手の非人間化

Dillingham は「その分身である Merrymusk 同様、語り手は人間性の叫びに対して心を石にすることにより、世間や人生に対する英雄的な挑戦の代償を払わされることになる (True to Merrymusk, his alter ego, the narrator will pay for his heroic defiance of life and the world by hardening his heart to the cry of humanity.)」¹⁷と述べている。鶏鳴を聞いて以来、人間としての優しさを忘れた語り手は、雄鶏を探す道すがら出会った年老いた農夫の労働に対し、「暖かで気も安らぐ春の日に、朽ちた柵の修理に取りかかること (undertaking the mending of rotten rail-fences in warm, relaxing spring weather)」は「絶望的で、骨が折れ、無益な試みだ (The enterprise is a hopeless one. It is a laborious one; it is a bootless one.)」(276)と軽蔑しつつ、己が探している雄鶏について老人に尋ねる。

“My friend,” said I, addressing this woeful mortal, “have you heard an extraordinary cock-crow of late?”

I might as well have asked him if he had heard the death-tick. He stared at me with a long, bewildered, doleful, and unutterable stare, and without reply resumed his unhappy labors.

What a fool, thought I, to have asked such an uncheerful and uncheerable creature about a cheerful cock! (277)

ここでは最早語り手には “labors” の音は聞こえてこない。Dillingham は「自らを凡人以上に引き上げたいという望みは賞賛に値するが、自らを半神に近づければ近づけるほど、人間は人間性を失い、情も無くす様になる (the desire to lift oneself above the level of ordinary man is admirable, but the closer one comes to being a demigod, the less human and consequently humane one becomes)」¹⁸と指摘しているが、ここでの語り手には、世の悲惨を見出し、救いの手を差し伸べたいというあの崇高な目的は全く影を潜め、ひたすら「心地よい (cheerful)」事を求め、己の目指す雄鶏を手に入れたいという利己心のみが突出している様に思える。語り手は相手の農夫のことを “idiocy” (276) 呼ばわりしているが、むしろこの場の語り手ほど “idiocy” という言葉に似つかわしい存在は作品中に見当たらない。語り手は明らかに鶏鳴の本質を見誤っており、鶏鳴の持つ恍惚感にのみ浸り、人間としての感覚を鈍化させ、ついには非人間化するまでに至ってしまっている。このような語り手には、壮麗な “Signor Beneventano” (283) を求めながら、まさに醜悪な “Shanghais” を

手にする恐れがあったのである。

Moby-Dick の語り手 Ishmael は第96章 “The Try Works” での経験を経て、自ら “demi-god” たらんとするあまり、ついには非人間化し、行方不明の息子の捜索を手伝ってくれという Rachel 号の船長の必死の願いをも拒否する Ahab 船長と距離を置くようになる。Ishmael は警告している。

Look not too long in the face of the fire, O man! Never dream with thy hand on the helm! Turn not thy back to the compass; accept the first hint of the hitching tiller; believe not the artificial fire, when its redness makes all things look ghastly.¹⁹

“Cock-A-Doodle-Do!” の語り手にとっても、人間回帰のためにはここで言われている「コンパス」や「舵柄の手応え」に相当するものが必要とされるのである。

4. 「叫び」の意味

4.1. 墓碑に秘められたもの

Dillingham は「語り手は Merrymusk の墓碑をキリスト教の精神ではなく、誇り高い挑戦の精神で作った (The narrator of “Cock-A-Doodle-Do!” does not have Merrymusk’s gravestone made in the spirit of Christianity but in the spirit of prideful defiance.)」²⁰ と言い、「墓碑が意味しているのは、語り手の目から見ると、人生の脅威となる力に対する完全な無関心を獲得することにより、自分の生き様、死に様を通し、Merrymusk が勝利を勝ち取ったということである (What the gravestone means is that in the eyes of the narrator Merrymusk won a victory through the way he lived and perished by achieving absolute indifference toward the terrifying forces of human life.)」²¹ と言っている。語り手はいわば Merrymusk の勝利の象徴として墓碑に關の声を上げる雄鶏を刻ませている。しかし、その勝利はまさに死と引き替えにもたらされたものであり、ある意味では “life” を超越したものだとも言える。一方、Merrymusk の住まいと対峙して走る鉄道は「人生 (life)」の象徴として「一時として立ち止まる間もあらばこそ、一瞬のうちに孤独な戸口を通り過ぎてゆき、姿を見せたかと思えばもう影も形もない (flying by the lonely door — no time to stop — flash! here they are — and there they go! — out of sight at both ends)」(282) 存在として描き出されている。このような意味あいでは、鉄道と Merrymusk の墓碑とはまさに対照的に並置されているのである。

更に Dillingham は墓碑に刻まれた「コリント前書からの Melville の引用は物語の主題、即ち己の個を確立し、己を知的に窒息させ、精神的に隷属させる世界からの独立を勝ち取るという語り手の必要性を示している (it [= Melville’s quotation from First Corinthians] suggests the primary theme of the story — the narrator’s need to insure his individuality, to gain independence from a world that intellectually stifles and emotionally enslaves.)」²² と言っている。その一方、Bickley は「自らが精神的、心理的に回復したと信じた語り手は、それによって雄鶏の所有者が生き、また死んだ挑戦的な楽天主義が、自分自身、この世の試練に耐える助けになると確信して帰宅する (Believing himself spiritually and psychologically rejuvenated, however, the narrator returns home still convinced that the

defiant optimism by which the cock's owners lived — and died — would help him endure his own earthly trials.)」²³と言っている。この両者はあくまでも Merry musk の持つ Ahab 的な要素が語り手に影響を与えたと解釈しているが、むしろ悲惨な一家のために墓碑を建ててやった語り手の行動にこそ注目すべきで、そこには先に述べた Ishmael の警告が見事に生かされている様に思える。ここには既に喪服を厭い、黒ビールという「絶望を防ぐ薬」に耽る語り手の姿は全く影を潜め、再び悲惨を直視しようという姿勢が伺えるからだ。

“heroism” は幸福、快樂、繁榮、富とのみ共存しようと考えていた語り手の認識は、“Why call me poor?” (286) という Merry musk の問いかけにより覆される。人間性を喪失した自分こそまさに “poor” な存在となっていたことに語り手は気づかされるのである。Merry musk との出会いにより、“heroism” はむしろ “woe” と切っても切れない関係にあることを悟った語り手は、次に自ら雄鶏の格好を真似、鶏鳴を発するという行動に出る。人によってはこれをグロテスクだと捉え、また別の者の目には滑稽だと映るかもしれない。Fisher は “Cock-A-Doodle-Do!” は、己が力んで肩入れしすぎるゆえに、易々と人生の価値より芸術の価値を優先させ、幻影の魅惑をありきたりの実体より好んでしまう芸術家を取り分け陥りやすい精神的アンバランスを最も長期に渡って Melville が見つめた作品である (“Cock-A-Doodle-Do!” however, is Melville's most prolonged look at the psychic imbalance to which the artist is particularly susceptible because the force of his commitment can so readily make the values of art superior to those of life, the charm of illusion preferable to mundane realities.)」²⁴と述べている。Melville 自身、自らを客観視し、このような “imbalance” を修正する「舵柄の手応え」を得るために敢えて語り手に「叫ぶ」という人間の原初的な感覚に訴える行動を採らせた様に思える。“Cock-A-Doodle-Do!” は “demi-god” に憧れつつも、“defiant” な姿勢を貫くあまり、“woe” を見失う方向へは決して向かわぬという今後の Melville 文学の行方を決定した作品であると言える。

注

¹ Herman Melville, “Cock-a-Doodle-Do! Or the Crowing of the Noble Cock Beneventano,” in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986), p. 269. 以下 “Cock-A-Doodle-Do!” 及びその他 Melville の諸短編からの引用は全てこの版を用い、頁数は本文 () 内に示すこととする。

² Merton M. Sealts, Jr., “The Chronology of Melville's Short Fiction, 1853-1856,” rpt. in *Pursuing Melville 1940-1980* (Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1982), p. 227.

³ Hershel Parker, *Herman Melville: A Biography, Volume 2, 1851-1891*, (Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press, 2002), p. 168.

⁴ *Ibid.*, p. 164.

⁵ William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction: 1853-1856*, (Athens: Univ. of Georgia Press, 1977), p. 68.

⁶ *Ibid.*, p. 60.

⁷ *Ibid.*, p. 59.

⁸ Parker, *Herman Melville: A Biography, Volume 2, 1851-1891*, p. 168.

- ⁹ Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale*, vol. 6 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988), p. 485.
- ¹⁰ Ibid.
- ¹¹ Dillingham, *Melville's Short Fiction*, p. 64.
- ¹² Marvin Fisher, *Going Under: Melville's Short Fiction and the American 1850's* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1977), p. 169.
- ¹³ R. Bruce Bickley, Jr., *The Method of Melville's Short Fiction*, (Durham, N.C.: Duke Univ. Press, 1975), p. 63.
- ¹⁴ Ibid., pp. 63-64.
- ¹⁵ *Melville's Short Fiction*, p. 73.
- ¹⁶ Fisher, *Going Under*, p. 178.
- ¹⁷ *Melville's Short Fiction*, p. 73.
- ¹⁸ Ibid., p. 72.
- ¹⁹ *Moby-Dick*, p. 424.
- ²⁰ *Melville's Short Fiction*, p. 70.
- ²¹ Ibid., p. 71.
- ²² Ibid., p. 74.
- ²³ Bickley, *The Method of Melville's Short Fiction*, p. 66.
- ²⁴ *Going Under*, p. 170.